

新大間池橋 (PC押出し工法) の施工報告

(株)ピーエス三菱	正会員	○橋内	剛
(株)ピーエス三菱	正会員	小川	剛
(株)ピーエス三菱	正会員	片岡	智宏

キーワード：PC押出し架設工法，平面線形，幅員変化，2室箱桁断面

1. はじめに

新大間池橋は、主要地方道筑紫野古賀線（須恵町・粕屋町工区）のバイパス整備工事の南側起点に位置する農業用貯水池である新大間池を渡る橋長175.0mのPC3径間連続2室箱桁橋である。本橋の架設工法は、架設位置上空に高压線が架空されているために上空作業に制約を受けることと、施工時における新大間池の水質汚濁などの阻害を最小限にする必要があることなどからPC押出し工法が採用された。本橋は平面曲線と縦断曲線を有する線形条件に加えて、15.90～18.65mの幅員変化を有しているため、高精度な押出し架設管理が必要であった。本橋の押出し架設における施工段階での検討と施工管理方法について報告する。

2. 工事概要

本工事の工事概要を以下に示す。また、図-1に上部工構造図を示す。

工 事 名 県道筑紫野古賀線新大間池橋

(仮称) 橋梁上部工工事

施工場所 福岡県糟屋郡須恵町大字植木

～糟屋郡粕屋町大字大隈

工 期 平成27年7月～平成29年3月

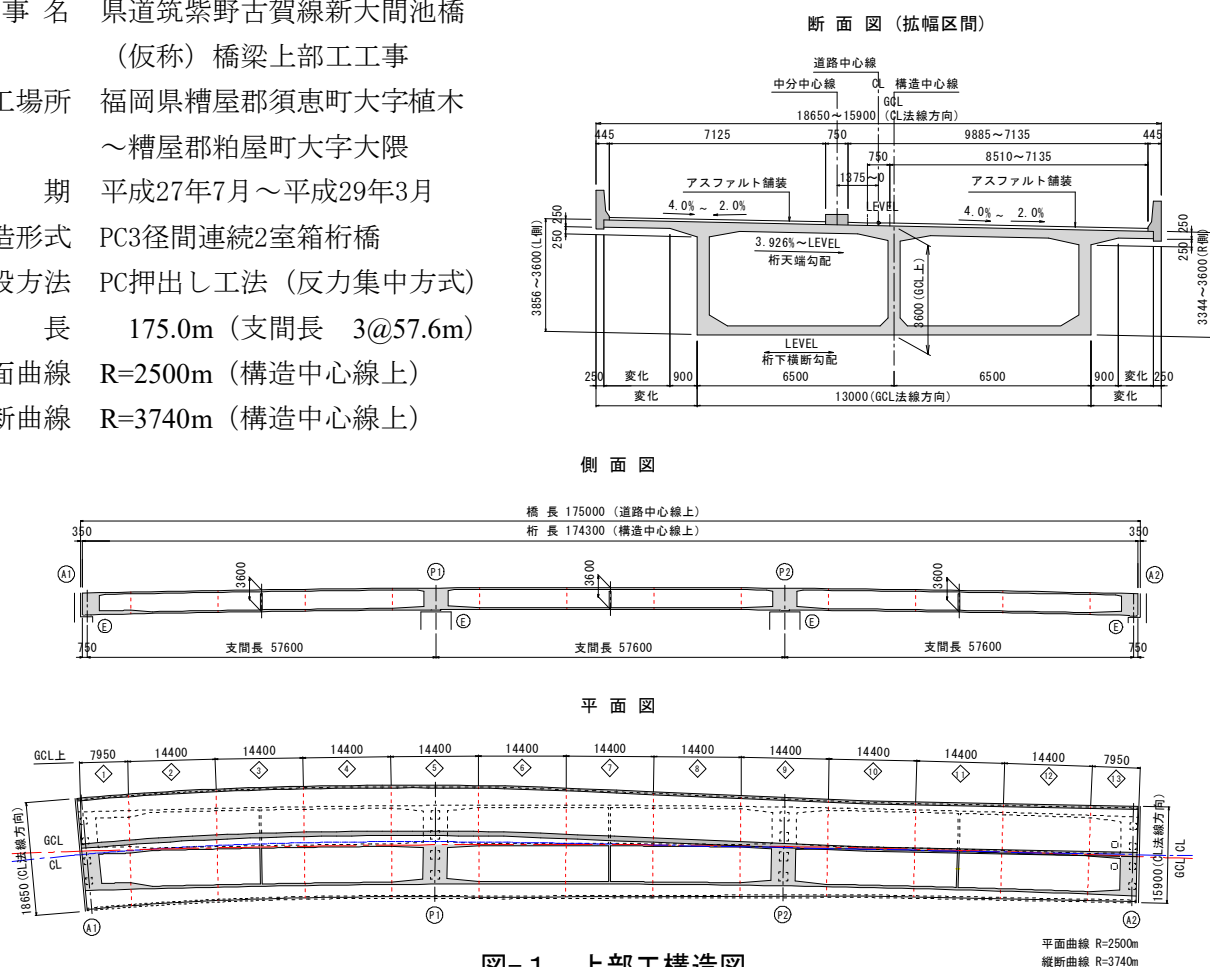
構造形式 PC3径間連続2室箱桁橋

架設方法 PC押出し工法 (反力集中方式)

橋 長 175.0m (支間長 3@57.6m)

平面曲線 R=2500m (構造中心線上)

縦断曲線 R=3740m (構造中心線上)



3. 施工計画および施工方法

3.1 主桁製作ヤードおよび押出し工法の選定

主桁製作ヤード位置は、A1橋台背面が県道との合流位置となることから十分なスペースが確保できないため、A2橋台後方を主桁製作ヤードとした。そのため、A2橋台側からA1橋台側への一方向押出し架設を行う計画とした。

本橋のP1、P2橋脚は新大間池内に構築されることと、上空に高压線が架空されていること（写真-1）などから、各橋脚には押出し装置を設置することが困難であった。このため、押出し工法には、A2橋台に押出し装置を設ける反力集中方式が採用された。

3.2 主桁製作工

主桁は製作ヤードにおいて、1ブロックあたりの製作長を7.95～14.4mとして、全13ブロックによる分割施工とした。

3.3 押出し架設

本橋の押出し架設時における最大総重量は7650t（主桁重量7400t、大型鋼製3主構手延べ桁重量250t）である。押出し装置の必要推力は、滑り支承の摩擦抵抗、縦断勾配の影響および安全率を考慮して最大総重量の10%とし、押出し装置には、200t油圧ジャッキ4台を使用した（写真-2、3）。

4. 施工段階での検討および施工管理方法

4.1 施工上の課題

本橋の押出し架設時において、以下に示す施工上の課題があった。

4.1.1 事前検討課題

本橋の構造的背景を要因として、施工前に詳細検討が必要と考えられた主な課題を以下に示す。

①2室箱桁断面であることから、押出し架設時に

おける外ウェブと中ウェブの直下に配置される滑り支承の反力分担率の確認が必要であった。

②手延べ桁と橋体の連結部は、連結PC鋼材や鉄筋が密集しており、補強材同士の干渉が懸念された。

③支承のソールプレートは製作ヤードで予め設置される一方で、主桁長が175mと長いため、主桁短縮量が押出し架設完了後の支承据付け精度に影響を及ぼすことが懸念された。

4.1.2 施工管理における課題

①平面曲線、縦断線形および幅員変化を有することから高精度な押出し架設管理を要する。

②曲線での押出し架設となることから、左右のジャッキ圧力バランスや横ずれ対策が重要となる。

4.2 各課題に対する検討および施工管理方法

それぞれの課題に対する検討結果および施工管理方法を以下に述べる。

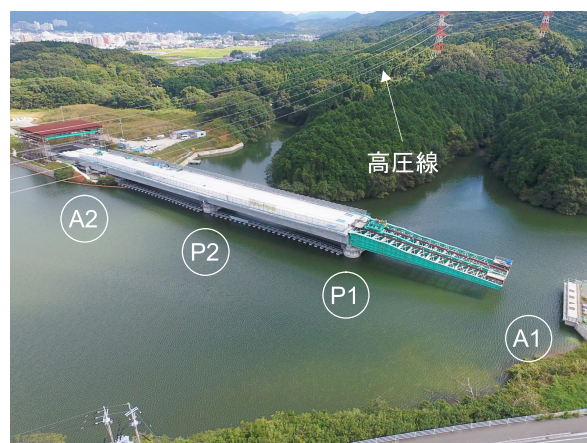


写真-1 架設状況全景



写真-2 押出し状況（押出し装置）



写真-3 押出し状況（滑り支承部）

4.2.1 事前検討課題に対する検討

（１）滑り支承の反力分担率の検討

押出し架設時に、点となる滑り支承には、最大総重量 7650t による大きな鉛直反力が作用するため、滑り支承の安全性および滑り支承から伝達される荷重に対しての主桁の安全性を確認する必要があった。安全性の照査を行う上で、外ウェブと中ウェブに作用する反力分担率を明確にするために、3次元 FEM 解析を実施し鉛直反力の分担率を算出した。

FEM解析モデルを図-2に示す。主桁全体をソリッド要素でモデル化し、主桁自重を載荷した。解析ケースは、仮支点位置が横桁位置にある場合、および支間1/4位置にある場合の2通りを解析した。

FEM解析により得られた反力分担率を表-1に示す。横桁位置および支間1/4位置は横方向の剛性が異なるため、仮支点位置によって、分担率への影響があることが確認された。押出し架設時の各ウェブの鉛直反力分担率は変動するため、分担率の最大値より鉛直反力を算出し、滑り支承および主桁の安全性を検討、照査した。

（２）CIMによる鋼材干渉チェック

手延べ桁を連結するA1端支点横桁部は、押出し工法特有の架設PC鋼棒および手延べ桁連結PC鋼棒などが密集しており、それら鋼材、付属物などの干渉が懸念された。そこで、事前に3次元モデルによる干渉チェックを実施した。作成モデルを図-3に示す。干渉チェックの結果、干渉する鉄筋については配置位置や加工形状を変更し、手延べ桁連結PC鋼棒についても、主方向ケーブルが密集する箇所に配置するため、鋼材相互の適切な空きが確保できるように配置位置を検討した。また、3次元モデルを活用して鉄筋、PC鋼材、シースなどの取り合いを現場作業員とともに確認を行い、各材料の組立て順序の事前検討を行うことで、現場作業をロスなく効率的に進めることができた。

（３）主桁短縮量の検討

支承のソールプレートは製作ヤードで予め設置されるため、主桁短縮量が押出し架設完了後の支承据付に影響を及ぼすことが懸念された。

桁短縮量を高い精度で求めるため、使用するコンクリートの物性値試験を実施し測定した。静弾性係数試験により得られたヤング係数は、 $3.78 \times 10^4 \text{ N/mm}^2$ であり、この値を用いて主桁短縮量の計算を行った。圧縮クリープ試験および乾燥収縮試験の試験期間（材齢）は、6カ月間とし、試験から得られた試験値と、コンクリート標準示方書2012年で示されるクリープ係数および乾燥収縮ひずみの予測式から求まる予測値との比較を行った。試験値と予測値を表-2に示す。試験値と予測値の比率を、道路

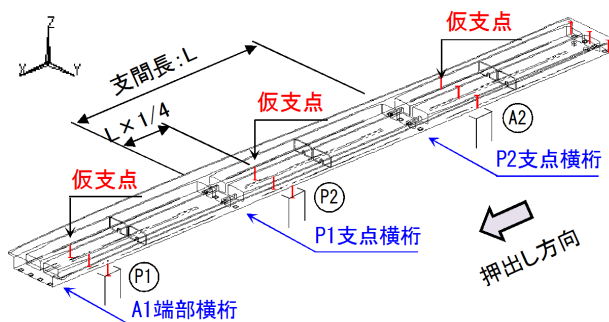


図-2 FEM解析モデル（仮支点が支間1/4位置）

表-1 反力分担率

仮支点位置	反力分担率 (%)	
	外ウェブ	中ウェブ
横桁位置	28～30	40～44
支間1/4位置	29～32	36～42

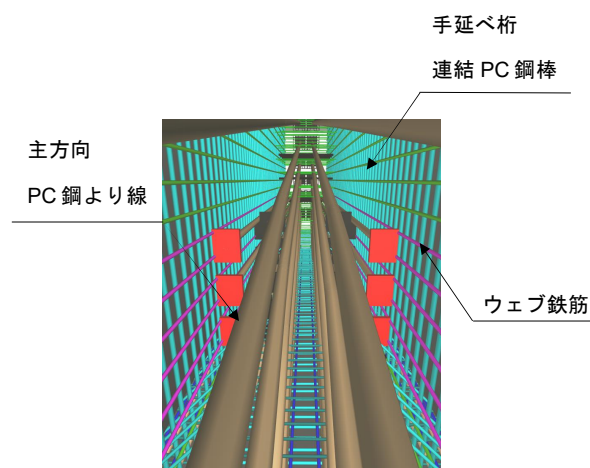


図-3 CIMモデル

（ウェブ内の干渉チェック例）

表-2 試験値と予測値の比較

物 性	試験値 (6カ月間)	予測値 (コン標示)	比率
クリープ係数	1.866	1.523	1.225
収縮ひずみ	625 μ	395 μ	1.582

橋示方書より算出されるクリープ係数，乾燥収縮度の数値に乗じて計算を行った。主桁短縮量は全体で約125mmとなり，この結果を各ブロックの製作に反映することで，精度良く支承を据付けることができた。工事完了時における桁長は計画値に対して－10mmに収まった。

4.2.2 施工管理方法

（１）トータルステーションによる3次元計測管理

本橋は平面曲線と縦断曲線を有する線形条件に加えて幅員変化を有しているため，押出し架設の各施工ステップにおいて，計画軌道に対する橋桁の全体挙動を詳細に把握する必要がある。このため，トータルステーションを用いた3次元計測管理を実施した。トータルステーションのターゲットは，図-4に示すように1ブロックあたり2箇所設置し，出来形管理を行った。本施工管理方法により主桁の据付け精度を向上させることができた（表-3）。

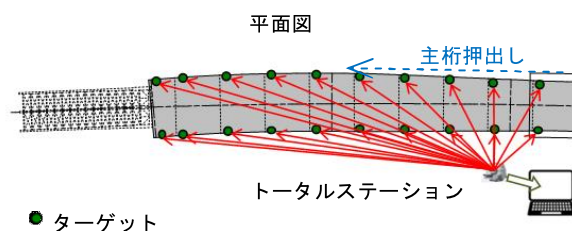


図-4 3次元計測管理概要図

表-3 主桁の据付け誤差

橋軸方向	橋軸直角方向	計画高さ
7mm (桁端部)	0～6mm (橋梁全体)	－16～11mm (橋梁全体)

（２）押し出し量とジャッキ圧力の一元集中管理

平面曲線を有する本橋の押し出し架設作業では，左右のジャッキ圧力のアンバランスにより，左右の押し出し量に差が生じると，計画軌道から外れることが懸念された。このため，押し出し量と押し出し装置のジャッキ圧力の一元集中管理を行った。一元集中管理の概要を図-5に示す。これにより，各データをリアルタイムに把握することで，左右のジャッキ圧力管理を迅速に行うことが可能となり，押し出し架設作業中における橋軸方向の押し出し量の管理精度を向上させることができた。

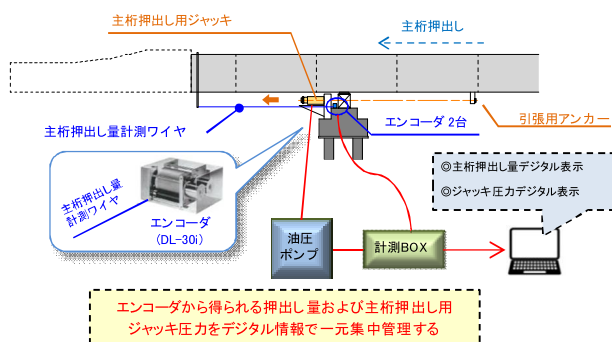


図-5 一元集中管理概要図

（３）横方向制御装置による平面曲線対応

平面曲線を有する押し出し架設となるため，押し出し作業中は横方向（橋軸直角方向）のずれが懸念された。このため，各滑り支承の主桁側面部に複数台のジャッキによる横方向制御装置（写真-4）を配置することで，押し出し作業時の横方向ずれを修正しながら押し出した。これにより，横方向の据付け精度を向上させることができた。



写真-4 横方向制御装置

5. おわりに

本工事は平成29年3月に無事，完成した。本橋は平面線形や幅員変化を有する広幅員の2室箱桁断面であったことから，高精度な押し出し架設管理が必要となったが，前述の事前検討および施工管理方法により，押し出し架設における計画軌道と計画高さを高い精度で管理することができた。本工事の計画，施工に際して，これまでにご指導，ご協力をいただいた関係各位に，この場を借りて感謝の意を表しますとともに，本橋の完成により周辺地域の交通利便性向上に寄与できることを期待したい。